日本南アジア学会第 27 回全国大会（2014 年 9 月 27 日・28 日，大東文化大学東松山キャンパス）[2A1-4]

ヒンディー語における所有からモダリティへの文法化

Grammaticalization from possession to modality in Hindi

今村 泰也（国立国語研究所）
IMAMURA Yasunari (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

1. はじめに[1]

本発表では，ヒンディー語の義務構文は所有構文から発達した（文法化）という仮説を提示し，言語類型論の観点から考察を行う。

ヒンディー語には複数の所有構文があるが，所有物が目に見えない無形の概念の場合，所有は与格（後置詞）と存在動詞を用いて X *ko* Y *honaa*「X に Y がある」のように表される（(1)-(2)）。

(1) *sab=ko* *jiivan=mẽ* *pareshaaniyãã* *hãĩ.*
全員=DAT 人生.M.SG=LOC 悩み.F.PL ある.PRS.3PL
「誰もが人生に悩みを持っている（直訳 : 全員に人生において悩みがある）」（Bhatt 2007: 175）

(2) *use* *apne* *paRosii=par* *sandeh* *th-aa.*
3SG.DAT REFL.GEN 隣人.M.SG=LOC 疑い.M.SG ある.PST-M.SG
「彼は自分の隣人に疑いを持っていた（直訳：彼に自分の隣人に対して疑いがあった）」
（古賀・高橋 2006: 1291a）

ヒンディー語の代表的な義務構文 X *ko* V-*naa honaa*「X は V しなければならない」[2]は上記の所有構文と構造が似ている。違いは所有物 Y（抽象名詞）の箇所が不定詞 V-*naa* になっていることである（(3)-(4)）。

(3) *ek din* *sab=ko* *mar-naa* *hai.*
ある日;いつか 全員=DAT 死ぬ-INF.M.SG ある.PRS.3SG
「［諺］皆いつかは死ななければならない（直訳：いつか全員に死ぬことがある）」
（古賀 2008: 66）

(4) *mujhe* *miThaaii* *banaa-nii* *hai.*[3]
1SG.DAT お菓子.F.SG 作る-INF.F ある.PRS.3SG
「私はお菓子を作らなければならない（直訳 : 私にお菓子を作ることがある）」（Kumar 1997: 115）

---

[1] 本発表の内容は今村 (2014) の一部をまとめたものである。

[2] 必要や義務を表すための構文として，ほかに X *ko* V-*naa caahie*「X は V するべきだ」，X *ko* V-*naa paRnaa*「X は V せざるをえない」などがある。

[3] この構文では不定詞 V-*naa* と存在動詞 *honaa* は先行する主格名詞に一致する（不定詞 V-*naa* は性・数に一致し，V-*naa* (M.SG)/-*ne* (M.PL)/-*nii* (F) のように変化する。*honaa* は現在形の場合は人称・数に一致し，過去形の場合は性・数に一致する）。したがって，この文の *banaanii hai* は *miThaaii*「お菓子.F.SG」に一致している。(3)のように先行する主格名詞がない場合は 3 人称・男性・単数形をとる。

2. X *ko* V-*naa honaa* が表す意味

Snell and Weightman (2003: 166) は，V-*naa honaa* は英語の“be to V”に訳すことができ，強制的な義務というよりも計画された出来事（programmed events）という意味であると述べている。V-*naa honaa* を「V することになっている」（be supposed to）と訳している先行研究もある（(5)）。

(5) *mujhe* *hindustaan* *jaa-naa=to* *hai* *lekin* *nahĩ̃* *jaa*
1SG.DAT インド.M 行く-INF.M.SG=TOP ある.PRS.3SG しかし NEG 行く
paa-ũũgaa.
できる-FUT.1.M.SG
‘I’m supposed to go to India but I won’t be able to manage it.’
「私はインドへ行くことにはなっているが，行けないだろう」（Hook 1979: 33）

このほかに X *ko* V-*naa honaa* は欲求の表現「V したい」や意図の確認にも使われる（(6)-(7)）。Genady (2005: 50) は X *ko* V-*naa honaa* の意味は曖昧で，その解釈はある程度，文脈によると述べている。

(6) *ek=ko* *miThaaii* *khaa-nii* *hai* *to* *us=ke* *paas* *paisaa*
一=DAT お菓子.F.SG 食べる-INF.F ある.PRS.3SG CONJ 3SG=GEN 近くに お金.M.SG
nahĩ̃ *hai*.
NEG ある.PRS.3SG
「ある人がお菓子を食べたいと思うと，その人はお金を持っていないのです」
（岡口・岡口 2012: 71）

(7) *tumhẽ* *haath* *dho-ne* *hãĩ?*
2PL.DAT 手.M.PL 洗う-INF.M.PL ある.PRS.3PL
「手を洗いますか（＝洗いたいですか）」（Snell and Weightman 2003: 166）

3. X *ko* V-*naa honaa* の否定と所有構文 X *ko* Y *honaa* との違い

X *ko* V-*naa honaa* の否定は「V しなくてよい」「V したくない」などの意味になる[4]。次例は所有構文 X *ko* Y *honaa* の否定（(8)a）と義務構文 X *ko* V-*naa honaa* の否定（(8)b）を並べたものである。否定辞の位置の違いに注意されたい。

(8) a. *hamẽ* *samay* ***nahĩ̃*** *hai*.
1PL.DAT 時間.M.SG NEG ある.PRS.3SG
「私たちは時間がない」（McGregor 1995: 55）

b. *mujhe* ***nahĩ̃*** *jaa-naa* *hai*.
1SG.DAT NEG 行く-INF.M.SG AUX.PRS.3SG
「私は行かなくてよい」（町田 2008: 87）

所有構文 X *ko* Y *honaa* の場合，否定辞は存在動詞 *honaa* の前に置かれる（否定辞は通常，動詞の直

[4] ほかの義務構文 X *ko* V-*naa caahie* の否定は「V するべきではない／してはならない」，X *ko* V-*naa paRnaa* の否定は「V しなくてよい／しないですむ」という意味を表す。

前に置かれる)。一方，義務構文 X *ko* V-*naa honaa* では否定辞は不定詞 V-*naa* の前に置かれる。これは義務構文において不定詞が動詞として機能し，*honaa* が助動詞として機能していることを示している（肯定文では所有構文と義務構文の構造は表面上同じになるため，この違いがわからない)。

義務構文において *honaa* が助動詞であることを示す証拠はもう 1 つある。所有構文 X *ko* Y *honaa* の場合，*aapko samay hai?*「(あなたは）時間がありますか」という疑問文に対して *honaa* だけで答えることができる。

(9) *hãã, (mujhe samay) hai.*
はい 1SG.DAT 時間.M.SG ある.PRS.3SG
「はい，（私は時間が）あります」（作例）

しかし, 義務構文 X *ko* V-*naa honaa* の場合, *mujhe bhii jaanaa hai?*「私も行かなければなりませんか」という疑問文に対して *honaa* だけで答えることはできず, (10)のように不定詞 V-*naa* が必要である（インフォーマントにも確認を行った)。

(10) *hãã, (aap=ko=bhii) jaa-naa hai. / *hãã, hai.*
はい 2PL.HON=DAT=INCL FOC 行く-INF.M.SG AUX.PRS.3SG はい AUX.PRS.3SG
「はい，（あなたも）行かなければなりません」（作例）

4. 所有からほかの文法カテゴリーへの文法化

世界の言語の所有表現を研究した Heine (1997) では，抽象的な概念領域である所有は具体的な領域から派生し，また，所有はほかの文法カテゴリーへ発達することが論じられている。ヒンディー語には英語の have に相当する動詞がなく，所有は X *ko* Y *honaa*「X に Y がある」((1)-(2), (8)a, (9)）や X *ke paas* Y *honaa*「X の近くに Y がある」((6)）のように具体的な表現で表される。そして，所有はモダリティ（命題に対する話し手の心的態度）へ発達したと考えられる。その第 1 の根拠は，多くの言語で所有構文と義務構文の間に構造的平行性が見られることである（(11)-(13)。(13)は印欧語以外の例)。

(11) Latin (Heine 1997: 32, Bauer 2000: 152)
a. *mihi est liber.*
1SG.DAT be.3SG.PRS book.NOM.SG
'I have a book.'
b. *mihi est legendum.*
1SG.DAT be.3SG.PRS read.GER
'I have to read.'

(12) English (Bhatt 1997: 21)
a. John has a book.
b. John has to read a book.[5]

[5] 英語の have to が must の代替表現として義務の意味で使われ始めたのは 16 世紀末からであり, You have to be happy「君は満足しているに違いない」のように認識的な意味（推量）を持つようになったのは最近のことである（中尾 1989: 143)。

(13) Yoruba (Kwa, Niger-Congo; Welmers 1973: 341-342)

a. *mo* *ní* *bàtà*.
1SG have shoes
'I have shoes.'

b. *mo* *ní* *l'átī lọ*.
1SG have to go
'I have to go.'

Narrog (2012: 268-273) は所有構文から派生したか，少なくとも所有構文に関係があり，モダリティを表す構文を「モーダル所有構文」（modal possessive constructions）と呼んで考察している。モーダル所有構文とはモダリティを明示する形態素を含まず, 構文全体がモダリティとして解釈されるもので, 表 1 のように 5 つのサブタイプがある（いずれのタイプも義務を表す）。そのうちの 1 つが V-ing is to X「X に V することがある」という構文で，ヒンディー語の X *ko* V-*naa honaa* やラテン語の *mihi est* 構文（(11)b）はこのタイプに該当する。

表 1　モーダル所有構文（Narrog 2012: 270）

	Construction		Languages
1	V-ing is to X	7	Amharic, Ewe, Kashmiri, Marathi, Qiang, Rapanui, Russian
2	X's V-ing	4	Rapanui, Hdi, Huallaga Quechua, Mina
3	X has to V/V-ing	4	Catalan, Berbice Dutch Creole, Ndyuka, Fongbe
4	X ows to V	4	Breton, Catalan, Russian, Swedish
5	X's belongs to V	1	Finnish

ヒンディー語の義務構文が所有構文から発達したと考える第 2 の根拠は通言語的な傾向性である。Narrog (2012: 268) は所有とモダリティの関係において前者から後者への拡張はあるが，その逆はない（一方向的な拡張）と述べている。Narrog (2012) はまた，所有構文が義務を表すようになる理由について次のように説明している。

> The inference most likely leading to the modal interpretation is as follows: if a state-of-affairs is presented as the possession of a human agent, it is presented as his or her responsibility, and from this, a necessity and obligation may be inferred. (Narrog 2012: 272)

我々の日常生活を例に考えてみよう。例えば，来週の月曜日に病院へ行くことが決まっている場合（＝「病院へ行く」という行為の所有），それは決定済みの予定になる。そして，誰かが同じ日に会いたいと言ってきた場合,「その日は病院へ行く（ことになっている）から会えない」のように予定として表現したり,「その日は病院へ行かなければならないから会えない」のように義務として表現したりする。ここに予定表現と義務表現との接点がある。ヒンディー語の抽象物所有の構文 X *ko* Y *honaa* の所有物 Y（抽象名詞）が不定詞 V-*naa*（行為を表す名詞）に置き換わった時，当該の構文が予定や義務を表すことの説明になる。また，上述のモーダル所有構文のデータと通言語的な傾向（所有からモダリティへの一方向的な拡張）もヒンディー語の義務的モダリティが所有から拡張したことの間接的

証拠になる。ヒンディー語の歴史において，いつごろ X *ko* V-*naa honaa* という形式が現れ，義務を表すようになったのか明確な時期は不明であるが，以下の Shapiro (2003) の記述から比較的遅い時期のことと考えられる（下線部は発表者が施した）。

> Lastly, the spread of patterns of indirect syntax, involving constructions of many different types (e.g. X *ko* Y *pasand honaa* 'for Y to be pleasing to X', X *ko hindii aanaa* 'for X to be able to speak Hindi', X *ko* infinitive (=Y) + *honaa* 'for X to have to do Y'), is highly characteristic of the development of MSH [Modern Standard Hindi]. (Shapiro 2003: 279)

5. まとめ

ヒンディー語の義務構文 X *ko* V-*naa honaa* は抽象物所有の構文 X *ko* Y *honaa* から発達したと考えられる。その根拠は以下の 3 点である。

(i) 所有構文と義務構文の構造的平行性
(ii) 通言語的な傾向性（所有から義務的モダリティへの一方向的な拡張）
(iii) ある行為の所有が予定や義務に解釈（推論）されることの妥当性

義務構文では *honaa* の語彙的意味は薄れ，V-*naa* と結んでモーダルな意味に変化している。また，*honaa* は意味の変化だけでなく，（否定辞の位置の違いや疑問文に対して単独で応答できないことから）動詞の性質を失い，助動詞に変化している。

略号一覧

1=1人称; 2=2人称; 3=3人称; AUX=助動詞; CONJ=接続詞; DAT=与格; F=女性; FOC=焦点; FUT=未来; GEN=属格; GER=動名詞; HON=敬称; INCL=包括的; INF=不定詞; LOC=所格; M=男性; NEG=否定; NOM=主格; PL=複数; PRS=現在; PST=過去; REFL=再帰代名詞; SG=単数; TOP=主題; V=動詞
（グロスのハイフン '-' は形態素境界，等号 '=' は接語境界を表す）

参考文献

Bauer, Brigitte (2000) *Archaic syntax in Indo-European*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
Bhatt, Rajesh (1997) Obligation and possession. *MIT Working Papers in Linguistics* 32: 21-40.
Bhatt, Sunil Kumar (2007) *Hindi: A complete course for beginners*. New York: Living Language.
Genady, Shlomper (2005) *Modality in Hindi*. München: Lincom Europa.
Heine, Bernd (1997) *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
Hook, Peter Edwin (1979) *Hindi structures: Intermediate level*. Ann Arbor: The University of Michigan.
今村泰也 (2014)「ヒンディー語の所有表現の研究」博士論文，麗澤大学.
古賀勝郎（編訳）(2008)『北インドの諺』三重：私家版.
古賀勝郎・高橋明（編）(2006)『ヒンディー語＝日本語辞典』東京：大修館書店.
Kumar, Kavita (1997) *Hindi for non-Hindi speaking people*. Second edition. New Delhi: Rupa & Co.
McGregor, R. S. (1995) *Outline of Hindi grammar*. Third edition. Delhi: Oxford University Press.

町田和彦 (2008)『ニューエクスプレス ヒンディー語』東京：白水社.

中尾俊夫 (1989)『英語の歴史』東京：講談社.

Narrog, Heiko (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.

岡口典雄・岡口良子 (2012)『ヒンディー語基礎文法便覧』東京：私家版.

Shapiro, Michael C. (2003) Hindi. In: George Cardona and Dhanesh Jain (eds.) *The Indo-Aryan languages*, 250-285. London; New York: Routledge.

Snell, Rupert and Simon Weightman (2003) *Teach yourself Hindi*. Sevenoaks: Hodder & Stoughton.

Welmers, William Everett (1973) *African language structures*. Berkeley; Los Angeles: University of California Press.